

また来たいと思える博物館を目指して

—今年度の特別展・企画展を中心に—

教育博物館

柏谷秀一 浦雅子 菅原芽衣

当館は今年度で9年目を迎え、平成29年の開館以来、来館者は10万人を達成した。今年は昭和100年、戦後80年にあたり、関連するような特別展・企画展・ミニ展示を開催した。来館者アンケートによるとリピーターもいる一方、約6割が新規の来館者となっている。何度も訪れてもらえるような博物館にするために、さまざまな工夫をして展示を行っている。

本稿では、開催したそれぞれの特別展・企画展・ミニ展示と来館者に魅力を発信するための取組みをまとめる。

<キーワード> 昭和100年 戦後80年 魅力発信 リピーター

I はじめに

現在、来館者数は10万人を超え、年間では約13,000人である。来館者アンケートの推移をみると、「初めて」の来館者が令和2年度は74%だったが、年を追うごとに割合は減少し、今年度は62%とリピーターが増加したことを示している。また、来館目的は47%が企画展・特別展となっている。

当館では、これまで年1回の企画展に加え、特別展、特集展示、ミニ展示などを年2～3回、また関連する講座やイベントを適宜開催してきた。内容としては、教育に特化した博物館として、学校生活、教科の内容などに関わる展示を中心に、オリンピックや朝の連続テレビ小説など話題になった事項に絡めた展示も積極的にやっている。

本稿では、「昭和100年」「戦後80年」という節目にあたる今年度の取組みについて考察した。

II 特別展・企画展・ミニ展示・イベントの概要

1 特別展「休み時間と遊びの空間」

(1) 期間 令和7年9月13日(土)～12月14日(日)

(2) 展示内容および展示資料

休み時間は、学習の合間に友達と自由に過ごせる、子どもたちが学校生活で楽しみにしている大切な時間である。その空間には、友達との会話や、昔から変わらない遊び、時代とともに変化していく遊具などがある。また、教科書から遊びを得ることもある。

一般に小学校では、2時間目と3時間目の間と給食後に、20分間程度の少し長めの休み時間がある。こうした休み時間に友達と遊んだ思い出は、今でも記憶に残っているのではないかと考える。自分たちで考え、友達と遊ぶことで仲間との絆を深め、豊かな人間関係を築いてきたのである。

今回の展示では、移り変わってきた学校の遊具や遊び、教科



図1 屋外で使用された遊び道具

書で知る遊びなどについて展示を行った。

① 2時間目と3時間目の間の休み時間

授業と授業の間は、一般的に「休み時間」と呼ぶが、特に2時間目と3時間目の間の20分間程度の休み時間の呼び方は、地域や学校によってさまざまである。福井県内で多いのは「大休み」だが、他県では、「業間休み」「中休み」「長休み」「20分休み」などと呼んでいる地域もある。また、子どもたちに親しみを持たせるために学校独自の呼び方にしている学校もある。

この20分の休み時間には、業間体育（マラソンやなわとび）、縦割り活動、自由遊びなど、曜日や時期で内容（プログラム）を変えている学校もある。

② 休み時間を利用した体育増進のはじまり

1932（昭和7）年、当時の福井県知事より、「本県民の健康状態ハ之ヲ他府県ニ比シ著シク遜色アリ」として「体育運動ノ振興ヲ計ル」ことを求めた県民の体育の増進についての告諭が出された。同時に県下の小学校および幼稚園に対して体育保健衛生に関する訓令も出された。「福井市小学校百年史」によると、これらを受けて積極的に体育増進運動を進める取組みが始まり、多大な効果が得られたとされている。以下は告諭の内容である。

1. 屋外に出でよ

始業前・昼食後・休憩時間ならびに体操科教授時間は、降雨雪時にあらざる限り、たとえ地面湿潤なりといえども屋内運動場を使用せざること。

4月はじめより10月15日までの間におこなう諸儀式にありても、拝賀式を除く外はすべて戸外でおこなうこと。

2. 新鮮な空気を吸え。

3. 日光に浴せよ。

4. 皮膚を丈夫にせよ（6月～9月間 乾布まさつの励行）。

5. 職員は児童と共に毎日始業前、朝間体操を行うこと。

6. 栄養に注意せよ。

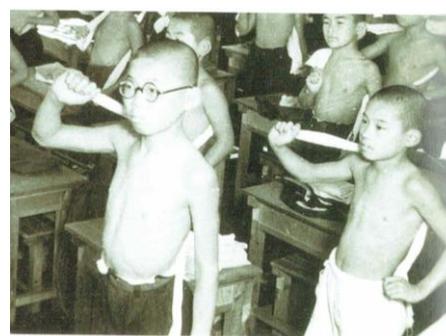


図2 乾布摩擦
越前市武生西小学校 1949(昭和24)年

休み時間のこれらの取組みが、現在の福井県小学生の全国体力トップクラスに結びついていると考えられる。

③ 健康づくりのために

1976（昭和51）年頃、大野市下庄小学校では、健康づくりのため業間運動後に子どもたちが煮干しを食べる取組みを行っていた。保護者アンケートの92%が「学校で煮干しを食べてほしい」と回答したことをうけて、業間運動後に一人約3g（10匹）の煮干しを提供するようになった。運動後の空腹のためか子どもたちは喜んで煮干しを食べたようである。また、家庭にも普及し、家族ぐるみで煮干しを好んで食べ、その効果からか、よい歯を作ることへの意欲も高まっていたと言われている。

乾布摩擦は、風邪予防として、1949（昭和24）年から1980（昭和55）年頃まで全国的に行われていた。休み時間中に乾布摩擦の時間が設定され、低学年は上半身裸、高学年は服を着たまま実施していた。



図3 一人あたりの煮干し
大野市下庄小学校 1976(昭和51)年



図4 乾布摩擦をとりあげた新聞記事
大野市下庄小学校 1976(昭和51)年

一日の生活時間割(冬時間)

8:45 - 8:50	職員朝礼
8:50 - 8:55	朝の歌
8:55 - 9:40	1校時
9:45 - 10:30	2校時
10:40 - 11:30	3校時
11:35 - 12:20	4校時
12:20 - 1:00	給食
1:20 - 1:45	清掃
1:50 - 2:35	5校時
2:45 - 3:30	6校時
4:00	下校

図5 昭和の時間割
越前市立武生西小学校
1962(昭和37)年

④ 運動場に遊具が増える

文部省は昭和後半、学校における体育・スポーツの指導の充実を図るため、先進的、積極的に実践研究を行う研究推進校を全国で指定した。1976(昭和51)年度から体力づくり推進校、1980(昭和55)年度から武道指導推進校、1990(平成2)年度から運動部活動研究推進校が指定された。それに伴い、福井県ではPTAも協力し、運動場の整備や遊具の追加などが行われた。



図6 PTAによる遊具設置作業
あわら市芦原小学校 昭和60年代

⑤ 減らされる休み時間と遊具

平成に入ると、体力向上の取組みのため、業間運動が多くなり、委員会や係の活動のために休み時間を使用するなど、子どもたちは自由な休み時間を過ごすことが少なくなった。

昭和に設置された遊具は、老朽化して危険が増してきたため、2002(平成14)年、国が安全対策の指針を出して以降撤去されるようになった。福井市内の学校では、令和に入ってから3分の1の遊具が撤去されている。

また、これまでは土曜日も友達と休み時間を過ごすことがあったが、2002(平成14)年に学校週5日制となり、学校での休み時間は減少し、各家庭で過ごす時間が増えた。

日課時間表

(4月～10月生活時程)

月 曜 時 程		火～金 時 程	
職員朝礼	8:00—8:05	職員朝礼	8:00—8:05
児童朝礼	8:05—8:25	朝の会	8:05—8:20
朝の会	8:30—8:40	1校時	8:20—9:05
1校時	8:40—9:25	2校時	9:15—10:00
2校時	9:35—10:20	あじまのタイム	10:05—10:25
3校時から火～金と同時程		3校時	10:40—11:25
土 曜 時 程		4校時	11:35—12:20
職員朝礼	8:00—8:05	給食	12:20—13:05
朝の会	8:05—8:20	昼休み	13:05—13:25
1校時	8:20—9:05	清掃	13:30—13:45
2校時	9:15—10:00	5校時	13:50—14:35
3校時	10:20—11:05	6校時	14:45—15:30
清掃	11:10—11:25	下校	16:30
下校	12:00		
クラブ会	15:00—15:45		
児童会			

図7 平成の時間割
越前市立味真野小学校 1991(平成3)年

⑥ 次の時代へ

2020（令和2）年には、日本でも新型コロナウイルス感染症が確認され、ほとんどの学校は3月から臨時休校となった。6月頃から学校は再開されたが、接触がある活動や対面の活動は制限された。休み時間も読書やお絵かき、ぬり絵など友達との触れ合いの少ない遊びが主流となった。2023（令和5）年には5類感染症に移行されたため、多くの活動が再開され、遊びも以前のように友達との触れ合いが可能になった。

また、2020（令和2）年、国のGIGAスクール構想により、児童・生徒に一人一台タブレット端末が整備された。タブレットが整備されたことにより、充実した探究活動やプログラミングの授業などができるようになった。学校では、休み時間のタブレットの使用ルールを設け、雨天時やタイピング遊びに限って使用を許可している。授業で終わらなかった調べ活動を休み時間に行っている児童もみられる。

このように、休み時間の過ごし方も、校庭や体育館で運動を楽しむ、図書室で読書をする、教室でタブレットを使用する、友達とおしゃべりをして過ごすなど、時代と共に多様になっている。



図8 休み時間に校庭で遊ぶ児童
福井市河合小学校 2025(令和7)年

⑦ 教科の中の遊び

遊びは、主に低学年の教科書の中に多く描かれている。教科に遊びと記載されるようになったのは、1977（昭和52）年の学習指導要領からで、図画工作には「造形的な遊び」が導入された。

例えば、図画工作の「砂あそび」は砂から感じたこと、想像したこと、見たことから表現していくというように、児童の自由な発想を豊かにすることを目標にする。また、昭和後期の道徳副読本では、丈夫なからだをつくるために、外で元気に遊び、規則正しい生活を送り、食事をしっかり食べ、清潔にすることということが描かれていた。

(3) 展示を通して

今回の展示では、今年度が昭和100年にあたることから、昭和から現在に至るまでの小学生の休み時間と遊びについて紹介した。昭和から現在まで、社会的情勢や環境の変化により、子どもたちの遊びは変化してきた。しかし、遊びの中で見せる子どもたちの笑顔は、今も昔も変わらずに存在しているのではないかと感じた。

また、学びの中で遊ぶことは、楽しさだけではなく、人とのつながりや、物を大切にする心、考える力、思い出などを∞（無限大）に得ることができると感じた。

2 企画展「教科書でたどる昭和100年」

(1) 期間 令和7年9月13日（土）～12月14日（日）

(2) 展示内容および展示資料

今年は、昭和への改元から100年の節目にあたる。この100年間で、国内外の情勢は大きく変化し、それに伴って教科書にもノンフィクション、伝記、物語など、時代を映し出すさまざまな題材が取り上げられてきた。

今回の展示では、過去100年の歴史を象徴するできごとが、教科書を通じてどのように子どもたちに伝え

られてきたのかを、関連する資料とともに紹介した。資料数は122点であり、うち104点が教科書である。年代の区切りについては、下記のように、便宜上10年をおおよその目安としてとらえ、その時期に特徴となるようなできごとや時代を反映するような単元について展示を行った。

昭和一桁	大陸への侵攻、軍国主義の台頭
昭和10年代	侵略戦争と敗戦
昭和20年代	復興と民主主義
昭和30年代	高度成長と科学の発展
昭和40年代	高度成長の終焉
昭和50～60年代	地球規模の問題
平成一桁	阪神・淡路大震災
平成10年代	インターネットの普及、総合的な学習の時間導入 学校週五日制の完全実施
平成20年代	東日本大震災、知識偏重から「思考力・判断力・表現力」の育成重視へ
令和の時代	コロナ禍による教育の変化
時代をまたいだ展示	戦争・原爆を取り上げた物語

この稿では、特定の個人や地域、政策などが多く取り上げられていた昭和期と、戦争に関する展示を中心に紹介し、そのほかの年代については時代の概観を記述する。

① 昭和一桁の時代 1926(昭和元)年～1934(昭和9)年

昭和に改元された1926年当時は、男子普通選挙が実現し、農民、女性の地位向上などを求める社会運動も活発になっていた。また、雑誌や映画など大衆文化が発展するなど、大正デモクラシーの風潮が残っていた。

しかし、1930(昭和5)年に昭和恐慌がおり、経済の行き詰まりが生じると、日本は満州を武力で支配しようとして1931(昭和6)年に満州事変を起こし、翌1932(昭和7)年に「満州国」を建国するなど、軍国主義が台頭した。

ア 「あじあ」に乗りて

日本が軍事行動によって中国東北部を支配下に置いた「満州国」では、当時アジア最速を誇った特急「あじあ号」が運行した。国語教科書には、中国からの租借地、関東州の大連からハルビンまでの運行区間を旅行する設定で描かれた紀行文が掲載され、沿線の風景や産物などが詳細に描かれている。なお、戦後にも昭和40年代ごろまで鉄道や高速道路、トンネルなどの建設を取り上げた単元が見られる。



図9 あじあ号を描いた満州国切手
1944(昭和19)年

イ 「英雄にされた」三勇士(爆弾三勇士)

1932(昭和7)年、中国の上海で戦闘中、敵の陣地にある鉄条網を爆破するため、3人の兵士が導火線に点火された爆薬筒を持って突撃した。しかし先頭の兵士が撃たれ、鉄条網付近で前進も後退もできなくなった。まもなく火薬が爆発し、鉄条網は爆破されたものの3人は戦死した。このことは美談に仕立て上げられて映画や歌謡曲にもなり、のちに国語や唱歌の教科書にも取り上げられた(図10)。『初等科国語二』には3人の姓名が明記され、戦場の様子が詳細に描かれている。^{*1}また、当時子どもたちに絶大な人気があった田河水泡作のまんが「のらくろ」でもこの事件を想像させる場面がある(図11)。

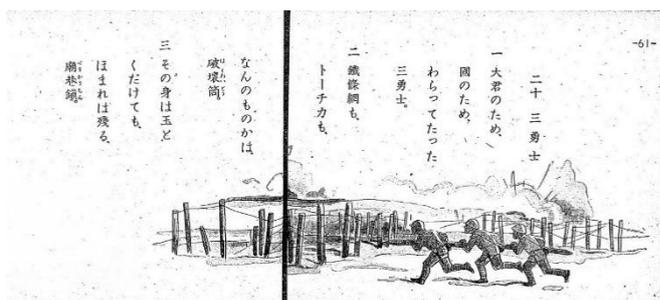


図10 文部省唱歌「三勇士」『初等科音楽一』
文部省 1941(昭和16)年



図11 田河水泡『のらくろ上等兵』(復刻版)
講談社 1969(昭和44)年
福井大学附属図書館所蔵 初出は1932(昭和7)年

このほか、この時期を取り上げた教科書単元には、男子普通選挙の実施をうけ、正しい投票の在り方を示した「選挙の日」、降参した敵に情けをかける「さるかに」、国際性のある「アメリカだより」なども掲載されていた。

② 昭和10年代～終戦まで 1935(昭和10)年～1945(昭和20)年

1937(昭和12)年に発生した盧溝橋事件をきっかけに、日本と中国は全面戦争に突入した。日本はドイツ・イタリアと同盟関係を結ぶが、アメリカとの関係は決定的に悪化し、1941(昭和16)年には太平洋戦争が始まった。

物量で劣る日本は、国民の生活を犠牲にして戦争を継続したが、1944(昭和19)年頃からは本土にも空襲が相次ぐようになった。1945(昭和20)年8月には広島と長崎に原子爆弾が投下され、さらに中立条約を結んでいたソ連が参戦した。8月15日、天皇によるラジオ放送(玉音放送)によって、国民は敗戦を知ることとなった。

小学校が1941(昭和16)年から国民学校にかわると、それにあわせ発行された教科書では戦時色が強くなり、軍国主義・忠君愛国を説く内容が目立つようになった。このような教育を受けた児童が軍国少年少女になるのは自然のことで、当時国民学校初等科3年の男子児童の作文^{*2}には「僕は英米がにくくて仕方ありません」「大東亜戦争も英米がおこしたのでせう」という記述がみられる。



図12 兵隊ゴッコ 『ヨミカタニ』
文部省 1941(昭和16)年



図13 サルとカニの戦争で加減算を学習
『カズノホン』文部省 1941(昭和16)年

③ 終戦～昭和20年代 1945(昭和20)年～1954(昭和29)年

1945(昭和20)年、日本は連合国によって占領され、ポツダム宣言に基づく非軍事化と民主化の政策が進められた。同年秋には憲法改正の作業も始まった。

1946(昭和21)年11月には、国民主権・基本的人権の尊重・平和主義を三大原則とする新憲法(日本国憲法)

が公布され、翌年5月に施行された。

教育の民主化も進められ、教育勅語に基づく国家主義的な教育や軍国主義が禁止された。敗戦直後は新しい教科書の準備が間に合わず、従来の教科書から不適切な部分を削除した「墨塗り教科書」が使用され、小学校では日本歴史、地理、修身の授業が停止された。

新憲法施行と同じ1947（昭和22）年には、個人の尊厳や機会均等、9年間の義務教育などを盛り込んだ教育基本法が公布され、新しい教育制度が始まった。



図14 『あたらしい憲法のはなし』
文部省 1946(昭和21)年



図15 『社会科特集 農地改革』
文部省 1947(昭和22)年

この価値観の劇的な転換に、信念を持って指導に当たっていた教師に大きな戸惑いがあったことは想像に難くない。当時21歳の国民学校訓導*3は週案の備考欄に「教育者として自己の悩み」と題した文章を記し、戦時中の教育に対して痛切な反省の意を表している。校長もこれに対し同意するコメントを記しており、民主主義教育が戦争に対する深い反省から始まったことがうかがえる。

以下は訓導の記した文章である。教員となって間もない青年訓導が心情を吐露した貴重な資料として、書き下し文とともに展示した。

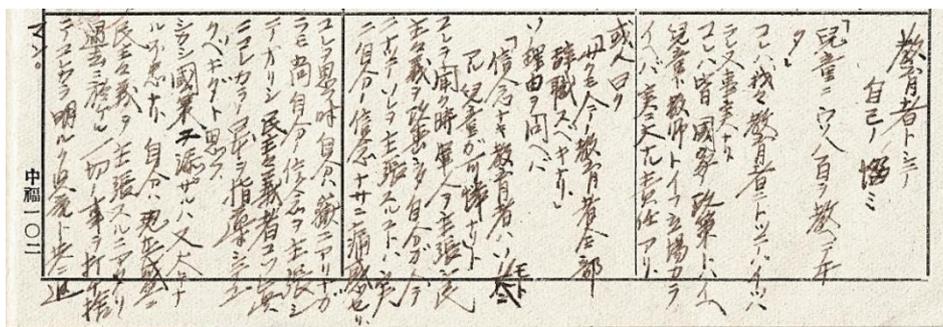


図16 週案に記された青年訓導の反省文 1946(昭和21)年1月

教育者として自己の悩み

「児童にうそ八百を教えていた」

これは我々教育者にとってはいつわられぬ事実なり。

これは皆国家の政策とはいえ、児童と教師という立場からいえば実に大なる責任あり。

或人曰く「少(すくな)くも今の教育者全部辞職すべきなり」と

その理由を問えば「信念なき教育者はそのもとにある児童が可憐なり」と。

これを聞く時、軍人を主張し民主主義を攻撃した自分が、今になってそれを主張することは実に自分の信念なきに

痛感せり。

これを思う時自分は、嶽(獄)にありながらも尚自分の信念を主張しておりし民主々義者こそ、真にこれからの日本を指導してゆくべきだと思う。

しかし、国策に添わざるは又大きなる不忠なり。自分は現在盛んに民主々義を主張するにあたり、過去に於ける一切の事を打ち捨て、これから明るく児童と共に進まん。

(左上に校長のコメント)

国策 国の指導方針に従い来たものなやみ同感

(原文は漢字とカタカナ表記、旧仮名遣い。読みやすいように筆者が句読点を適宜追加)

④ 昭和30年代 (1955~64)

1955 (昭和30)年頃から日本では高度経済成長が始まり、急速に経済成長や工業化が進行した。これを受けて「三種の神器」とよばれたテレビ・洗濯機・冷蔵庫が一般家庭に広まり、生活が大きく変化した。工業の発展により地方から都市への人口流入が進み、東京・大阪などの大都市が急速に発展した。

教科書にも鉄道の電化やトンネル・ダム建設、宇宙への関心など^{*4}、技術革新が明るい未来を実現することを示す単元が目立った。

⑤ 昭和40年代 (1965~74)

昭和40年代に入っても日本経済の成長は続いた。一方で都市の過密化、地方の過疎化が進むとともに、経済優先の考え方は、公害や開発に伴う自然破壊など、深刻な問題を引き起こした。1973 (昭和48)年には中東戦争を機に石油危機が発生し、物価の急上昇を招くなどして高度経済成長は終わった。

こうして、今までのような大量消費の時代は終わりを告げ、資源やエネルギーを節約する技術が進展することになった。

教科書では高速道路や原子力、人工衛星など科学の発展に関するもののほか、地熱発電、水産業の養殖、自然破壊や公害問題^{*5}などが取り上げられている。

⑥ 昭和50~60年代 (1975~89)

石油危機後、日本は輸出と公共投資の拡大によって不況から抜け出した。その過程でコンピュータが発展し、企業は情報を集め、活用することが求められるようになった。

日本はそれまでの重化学工業から先端技術産業に重点を移すことに成功し、経済大国となった。大企業に集まった資金は土地や株式などの購入に使われ、実体がない経済の拡大 (バブル経済) を引き起こした。

このころから教科書では地球の温暖化、オゾン層の破壊など、世界的な問題を取り上げた説明文が目立つようになり、震災などの例外を除いては、個々のできごとに関する説明文は数を減らしている。

⑦ 平成一桁の時代 (1989~97)

1989 (平成元)年頃はバブル経済のピークで、地価や株価が異常に高騰していた。しかし、1991 (平成3)年頃バブルが崩壊し、企業の倒産や失業率の上昇など、経済的な混乱が続いた。この後日本は長い間経済の停滞から抜け出すことができなかった。

1995 (平成7)年1月17日には淡路島を震源とする阪神・淡路大震災が発生。6,434人も命が失われ、建造物や経済にも大きな被害をもたらした。災害からの復興には若者を中心としたボランティアの活躍が見られ、市民の力や人々のきずなが注目された。

教育面では1992 (平成4)年の学習指導要領改訂により、考える力・体験的な学びに重点が置かれるようになった。また、小学校1・2年生に生活科が新設され、身近な生活や自然との関わりが重視された。

⑧ 平成10年代（1998～2007）

この時期はバブル崩壊後の不況から回復することができず、企業のリストラや就職氷河期が社会問題になった。1999（平成11）年、携帯電話でiモードが登場した。これまで通話が主な機能だった携帯電話は、インターネットが使えるようになり、さらにはメール、ゲームの機能も使えるようになった。翌年にはカメラ付きの機種も発売され、インターネットが急速に普及する要因となった。

教育の面では2002（平成14）年から新学習指導要領が施行され、学校週5日制が完全実施となった。土曜日の授業がなくなり、家庭や地域での学び、連携が重要だとされた。また、新たに「総合的な学習の時間」が導入されるなど、多くの知識を学ぶことよりも「考える力」「生きる力」を重視する方向への転換が始まった。グローバル化への対応として、小学校での外国語活動が試行的に始まったのもこの時期であった。

⑨ 平成20年代以降（2008～2019）

2008（平成20）年、アメリカから始まった不況は100年に一度と言われる世界的な不況となった。その回復途上の2011（平成23）年には東日本大震災が発生し、死者・行方不明者は合わせて22,000人以上に上った。

また、2007（平成19）年にiPhoneが登場すると、この時期にはスマートフォンが急速に普及し、SNSやアプリ文化が定着した。

教育分野では、これまで以上に知識偏重から「思考力・判断力・表現力」の育成が図られた。さらに生徒が主体的に学ぶ授業スタイル（アクティブ・ラーニング）が積極的に導入されるようになった。

⑩ 令和の時代（2019～）

2020（令和2）年に世界的に拡大した新型コロナウイルス感染症（以下コロナ）は、日本にも大きな影響があった。翌2021年にかけて4回にわたり緊急事態宣言が出され、感染を防ぐため家庭以外ではマスクを着用することが求められた。

2023（令和5）年コロナは5類に移行されたが、この前後で社会のあり方は大きく変化した。コロナの影響は学校現場も例外ではない。感染防止のため、オンライン授業が急速に広がり、楽しいはずの給食が前を向いて黙食の時間となった。これまで盛んに行われた音楽会・芸術鑑賞会・職場体験・集団宿泊活動・遠足などの学校行事も中止・縮小され、選抜高校野球など、課外活動の大会も中止が相次いだ。

学校行事は、コロナ終息後にも改めてその在り方が見直されることになった。

⑪ 戦争や原爆を題材とした戦後の教科書

年代別の展示とは別に、時代を超えて取り上げられてきたテーマとして、戦争に関する記述にも注目した。戦争や原爆を題材とした物語や詩などは、およそ半世紀にわたり継続して採録されている。

戦後の小学校国語教科書で、日本が関わる戦争を題材として初めて採録された作品は、1974（昭和49）年度発行の今西祐行作「一つの花」である。^{*6}

その後の改訂からは、複数の教科書出版社で戦争を扱う教材が採録されるようになり、平成元年度以降はすべての小学校国語教科書に戦争関連の教材が収録されている。終戦後約30年間、採録がみられなかった理由は明確ではないが、戦争や戦災を実際に経験した人々が「生き証人」として学校現場で語り継ぐ機会が十分にあったためと推測される。しかし時代が進むとともに戦争体験者の数は減少し、現在では直接話を聞くことは極めて難しくなっている。戦争関連教材が教科書に採録され続けている背景には、こうした状況を危惧し、平和への願いを込めて編集に携わる教科書編集者・著者の強い思いがあると考えられる。^{*7}

なお、福井県全域で採用されている光村図書の国語教科書では、前述の「一つの花」に加え、あまみきみこ作「ちいちゃんのかげおくり」も1977（昭和52）年度から現在まで継続して採録されている。

本コーナーでは、各出版社より9点の教科書を展示した。加えて、広島市教育委員会著作の「ひろし

ま平和ノート」を借用し、天野夏美作「岩田くんちのおばあちゃん」とあわせて展示した。

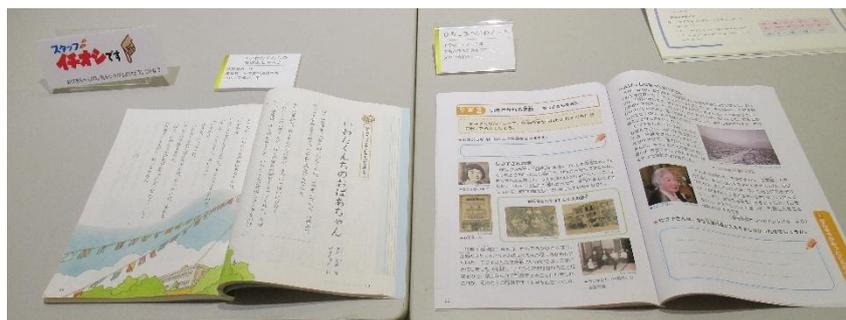


図17 左「いわたくんちのおばあちゃん」を掲載した国語教科書
『小学生の国語 四年』三省堂 2015(平成27)年
右「ひろしま平和ノート 小学1・2・3年」
広島市教育委員会 2023(令和5)年

(3) 展示を通して

当館ではほぼ毎年教科書に関する展示を行っており、今回は時代の変化により教科書に採録される内容が変化していくことが分かる展示を目指した。戦前・戦中の記述はもとより、この稿では取り上げなかったが、交通機関の目覚ましい発達、原子力の平和利用、コミュニケーションの手段の変化、環境問題など、戦後にも時代の変化をとらえた内容が教科書に採録されている。また、戦争の惨禍を伝えていく題材は時代が変わっても継続して採録されると考えられる。今後も所蔵する教科書を活用し、様々な角度から来館者を楽しませるとともに、取り上げたテーマについて考えさせるような展示を続けていきたい。

3 戦後80年ミニ展示「戦時中の学校と子どもたち」

(1) 期間 令和7年7月23日(火)～9月14日(日)

(2) 展示内容および展示資料

1945(昭和20)年7月12日に敦賀市、同月19日に福井市で空襲があり、福井県は戦争により大きな被害を受けた。本展示では、戦時中の学校の様子や子どもたちの学校生活に関する写真、当時の教科書、図画、慰問文、出征旗などの資料を展示した。戦後80年の節目に、これらの資料を通して福井県で実際に起こったできごとを実感し、命の尊さや平和の大切さについて考える契機となる展示になるよう構成した。

① 戦時中の小学校、国民学校

1935(昭和10)年頃から、当時の小学校であった尋常高等小学校では、学校生活の中に次第に戦時色が強く表れるようになり、子どもたちの日常生活にも大きな影響を及ぼしていた。兵士の出征時には、児童が日の丸の小旗を振って見送り、負傷兵の慰問などを通じて、戦争は教育の場においても日常的な存在となっていた。その後戦時体制が一層進み、1941(昭和16)年に国民学校制度が始まると、国家主義、軍国主義の教育が行われた。校庭を開墾してもやかぼちゃを栽培する食糧増産活動や、いなご採集などの勤労作業が教育活動に組み込まれた。また、空襲に備えた防空訓練や、慰問文・慰問袋の作成と発送も行われ、学校生活全体が戦争遂行を中心としたものへと変容していった。さらに、学校の記念誌によれば、福井県は大阪から約6,000人の児童を学童疎開として受け入れており、県内の児童は疎開児童と共に学習や勤労に取り組みながら、戦時下特有の学校生活を経験していた。



図18 出征兵士を送る児童
春江南尋常小学校(現・坂井市立
春江小学校) 1938(昭和13)年



図19 白衣勇士慰問
上郷尋常小学校(現・福井市本郷小学校)
1938(昭和13)年



図20 食料増産(馬鈴薯の収穫)
西安居村国民学校(現・福井市安居小学校)
1942(昭和17)年



図21 慰問袋の発送
福井第一尋常高等小学校(現・福井市足羽小学校)
1940(昭和15)年



図22 出征兵士への日の丸寄せ書き
春江東国民学校(現・坂井市立春江小学校)長の
記名がある
1944(昭和19)年

② 学習

終戦まで、尋常高等小学校および国民学校では、戦時体制の進行とともに学習内容が大きく変化した。授業でも「修身」を中心に忠君愛国や国への奉仕が強調され、国語・歴史・地理の教材も軍事や愛国心を高める内容が増えた。1941(昭和16)年に国民学校令が施行されると、教育の目的は「皇国民の錬成」と明確化され、体錬科として武道が必須となり、行進や号令訓練も日常化した。算数では戦争や兵隊を題材とした問題が用いられ、書写のお手本や読本にも戦時色の濃い語句や文章が多く見られるようになる。学習は知識の習得よりも、心身の鍛錬と国家への従属を重視する方向へ大きく傾いていった。

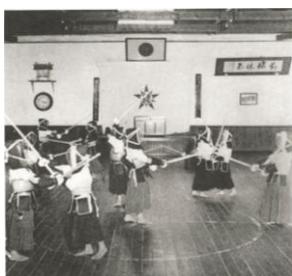


図23 剣道の授業
遠敷国民学校(現・小浜市立小浜美郷小学校)
1935(昭和10)年代



図24 児童の絵画
宝永国民学校(現・福井市宝永小学校)
1942(昭和17)年頃



図25 国民学校時代の教科書
左「初等科習字一」文部省1942(昭和17)年発行
右「カズノホン一」文部省1941(昭和16)年発行

③ 学校日誌より

展示室Aでは、戦時中の県内の学校の様子を伝える資料として、学校日誌や奉安殿の鬼瓦などを常設展示している。今回のミニ展示は、これらの常設展示もあわせて見学できる順路とし、当時の学校生活を多面的に理解できる構成とした。なかでも武生東国民学校の1945（昭和20）年の学校日誌には、戦況の悪化に伴う度重なる授業停止の記録や、8月14日に複数回発令・解除された空襲警報の状況が詳細に記されている。また、翌15日には昭和天皇による戦争終結の詔が発せられたことも記されており、終戦前後の緊迫した様子が伝わってくる。これらの記録から、戦争が子どもたちの学びや学校運営に深く影響を及ぼしていた実態を知ることができる。

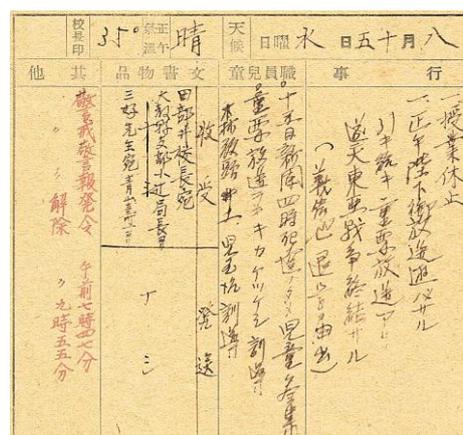


図26 終戦日の学校日誌

武生東国民学校（現・越前市武生東小学校）
1945（昭和20）年

④ 中学校

当時の中学校は旧制中学校であり、現在の高校に相当する。戦時中の旧制中学校の生徒たちの学校生活は、学業と軍事訓練が一体化したものであった。授業では国家観や規律を学ばされ、日常生活でも集団行動や礼儀が厳しく求められた。校外では行軍や射撃などの訓練が行われ、生徒たちは兵士としての心構えを身につけるよう指導された。北陸中学校（現・北陸高校）の卒業アルバムには、福井中学校（現・藤島高校）など数校の生徒が合同で野外演習を実施し、露営や射撃訓練に取り組む生徒たちの姿が写されている。



図27 野外演習での射撃訓練
北陸中学校（現・北陸高校）
1935（昭和10）年

(3) 展示を通して

今回のミニ展示にあたり、当館が収蔵する資料や各学校の記念誌を調査した。身近な福井県内の学校に関する資料は、説得力が高く、来館者が自分ごととして捉えやすいことを改めて実感した。また、戦後80年という節目に、ミニ展示という形で戦時中の資料を紹介できた点は意義深かった。さらに、開幕と同時に新聞社の取材が入るなどの反響もあり、比較的自由度の高いミニ展示をタイムリーな時に企画することの有効性を確認できた。

4 イベント

教育博物館では、季節に応じ、また企画展・特別展に関連させた各種イベントを実施している。ゴールデンウィークや長期休暇中は、子どもを中心とした家族層を主な対象とし、これまで来館経験のない層にも目を向けてもらえる機会となるよう企画している。

(1) イベント内容

令和7年度に実施した主なイベントは以下の4件である（令和8年1月末時点）。

① アートワークショップ「教科書のさし絵をサコッシュに描こう」

日時 令和7年4月27日（日）、5月3日（土）

各日①10:00～ ②14:00～（各2回）

会場 教育博物館 多目的室

参加人数は2日間4回の合計で44名であった。令和5・6年度にエコバッグを用いて実施し好評を得ていたワークショップを、今回はサコッシュに変更して開催した。前年度は子どもを対象としていたが、大人か

らの問い合わせが複数あったことを受け、今回は幼児から大人までを対象とした。親子での参加に加え、大人同士の参加も見られ、参加者は教科書閲覧室で思い思いの教科書を選び、そのさし絵を参考にしながら制作に取り組んでいた。



図28 イベント会場と制作したサコッシュ

② コカリナコンサート

日時 令和7年5月11日(日) 14:00~14:50

演奏 コカリナアンサンブル「Sunny Steps」

会場 教育博物館 展示室D

参加人数は53名であった。本イベントは、コロナ禍の期間を除き毎年開催しており、恒例行事として楽しみにしている来館者も多い。今回は特集展示「やなせたかしが伝えたこと」の会期中であったことから、やなせたかし作詞の「アンパンマンマーチ」や「手のひらを太陽に」も演奏していただき、展示と合わせてより一層楽しめる内容となった。昭和30年代をイメージした展示室内で、温かみのあるコカリナの音色による唱歌の演奏も行われ、参加者からは「教育博物館ならではの時間を過ごすことができた」と好評であった。



図29 コカリナコンサート

③ チャレンジランキング

日時 令和7年6月29日(日)、7月13日(日)、
7月27日(日)、8月10日(日)、8月24日(日)
各日①11:00~ ②14:00~ (各2回)

会場 教育博物館 多目的室

内容 「の」の字探し、紙ちぎりのぼし、缶つまみ

特別展「休み時間と遊びの空間」の関連イベントとして開催した。参加人数は合計34名であった。開催日が多かったこともあり、本イベントを目的とした来館者は少なく、来館時にイベント開催日であったため参加したというケースが多かった。ランキング表を特別展示室内に設置することで、イベント終了後に自然と展示会場へ足を運んでもらえるよう工夫し、イベントと展示をあわせて楽しんでもらう構成とした。主な対象は小学生を含む家族連れであったが、高齢者からも好評で、特に「豆つまみ」への関心が高かった。常設で自由に体験できる場を設けることも一つの案だと考えた。



図30 缶つまみ

④ リリアン体験

日時 令和7年7月19日(土)、8月3日(日)

会場 教育博物館 特別展示室

特別展「休み時間と遊びの空間」の関連イベントとして実施し、参加人数は合計26名であった。昭和期に流行した手芸「リリアン」を体験する内容とし、幅広い年齢層に体験してもらうため対象年齢の制限は設けなかった。小学生の母親世代でもリリアンを知らない参加者が多く、親子での体験が多く見られた。細かな作業ではあったが、手順に慣れると小学校低学年の児童も一人で作業を進めることができ、完成後はブレスレットにしたりストラップとしてバッグに付けたりして、満足そうな様子が見られた。



図31 リリアン体験

(2) 今年度のイベントを通して

当館でのイベントは無料を基本としているため、予算面での制約があり、毎回企画内容には工夫が求められている。しかしイベントはリピーターの増加や、新規来館者の獲得につながる重要な機会である。今後も対象年齢や展示との関連性を意識しつつ、博物館の魅力向上につながるイベントを継続的に企画・実施していきたい。一方で、イベント目的での来館促進や参加者数の確保、運営負担とのバランスなどについては、広報方法や実施形態を含め、引き続き検討していく必要がある。

5 アンケートと評価

今年度の来館者数は、14,034名であった。(令和8年1月31日時点)。10月には開館以来の来館者数が10万人に達した。来館者の年代は成人が一番多く、続いて高齢者(70歳以上)、小学生となっている。

来館者の居住地をみると、博物館近隣を含めた嶺北が約8割と多く、続いて県外となっている。嶺南からの来館者増加を目的の一つとして、毎年嶺南出張展示を開催している。令和4年度は1%であった嶺南からの来館者の割合は、今年では5%と増加しており、顕著な成果とは言えないものの、当館に対する認知や関心が広がりつつあると考えられる。

来館のきっかけは、チラシ・ポスターが一番多い。続いて、SNS・ホームページとなっている。チラシ・ポスターは、道の駅や観光案内所(福井駅、あわら温泉駅)など観光客に触れられるような場所に設置をしている。

また、アンケートでは、以下のような内容が書かれていた。

- ・昔の教科書に、ぼくが今習っている話があったこと(10代男性)
- ・入場料無料でこれだけ充実した展示が見られて驚きました。(30代女性)

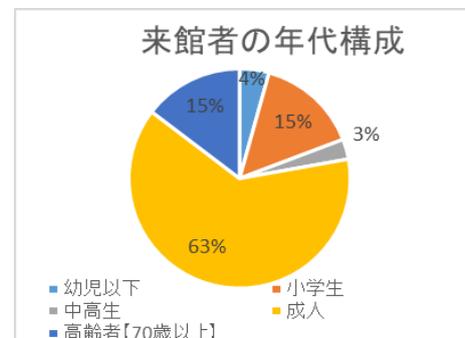


図32 来館者の年代構成

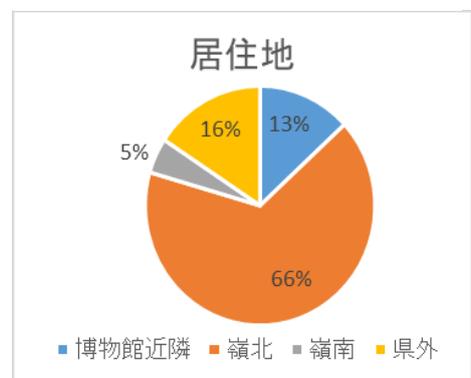


図33 居住地

- ・実際に触れたり、時代と教科書を照らし合わせたり、とても楽しかったです。(40代 女性)
- ・初めて来館しましたが、いろいろな展示物がなつかしく、たのしく拝見することができました。(50代 女性)
- ・いつも懐かしい企画ありがとうございます。いろんなところ、場面でもっとこういう施設があることをPRするとよいと思います。(60代 男性)
- ・開館して初めて来たけれど、感心させられた。市民、県民の方々にPR出来ればと思います(70代 女性)

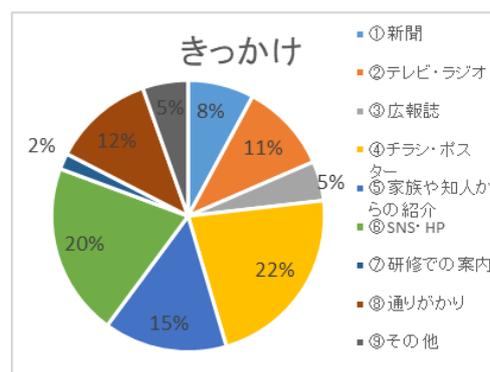


図34 きっかけ

アンケートではおおむね好意的な感想が多く、もっとPRすべきという意見が多かった。なかには、「自分の年代がなかった」「カフェがあるといい(休憩スペース)」「触れる、体験がもっとあるといい」などの感想もあった。全ての年代に対応した展示は難しいが、主な来館者層(50代～70代)の年代を意識した展示を増やしていけるといいのではないかと感じた。

当館に対する評価は、5点満点の4.67であった。「満足」という回答が72%、「やや満足」が24%で満足度が高かったことがわかる。

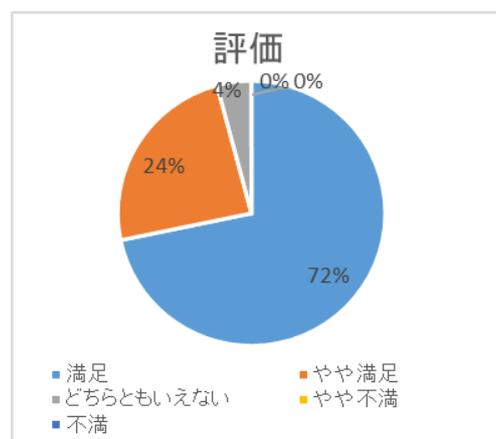


図35 評価

Ⅲ 今後の取組み

来年度は、開館10周年記念に向けた展示を計画している。開館当初から変わらなかった展示室なども改修し、新たな博物館の魅力を発信できるように計画している。

近年学校再編により、休校・閉校となった学校が増加している。残された学校資料の散逸を防ぐため、資料調査を幅広く実施し資料収集につなげていきたい。また今年度は、学校日誌の保管状況に関する調査を実施した。その結果、多くの学校で保存期間が過ぎた学校日誌を廃棄していることがわかった。学校の日常やできごとは、その時点での教師や児童にとっては自明なことであるが、時間の経過とともに忘れ去られ、後世の人々に伝わらないことも少なくない。今後も継続して学校の資料調査を進め、その結果を展示に生かすことで、さらなる来館者の増加を図りたい。

【参考文献】

- (1) 大野市下庄小学校(1976)「昭和51年度学校保健活動状況」
- (2) 芦原小学校百年史編集委員会(1988)「芦原小学校百年史」
- (3) 味真野小学校百周年記念誌編集委員会(1973)「味真野小学校創立百周年記念誌」
- (4) 武生西小学校創立百周年記念事業実行委員会(2011)「武生西小学校創立百周年記念誌『礎』」
- (5) 小林健壽郎(1974)「福井市小学校百年史」
- (6) 福田将太(2005)「対比の構造に着目して戦争文学を読む～戦争文学教材の史的概観と新しい学習指導について～」『信大国語教育』第15号
- (7) 山木晴香(2023)「国語教科書における戦争児童文学と家族:「一つの花」に注目して」『年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書』大阪大学

- (8) 福井県教育史研究室（1979）「福井県教育百年史第二巻通史編(二)」福井県教育委員会
- (9) 小林健壽郎（1973）「福井市豊小学校百年史」福井市豊小学校
- (10) 小林健壽郎（1993）「福井市木田小学校百年史」福井市木田小学校

注

- * 1 鉄条網が破壊されたことを見届けた兵士が「天皇陛下万歳」と言い残して絶命したと記述されている。
- * 2 「炭鉱のをちさんへ」という表題で原稿用紙に書かれていたが、実際に送られた手紙の下書きか否かは不明。
- * 3 戦争末期の1944(昭和19)年に師範学校を卒業し、就職して2年目だった。
- * 4 具体的には東海道本線の電化、新幹線の開業、関門トンネル、小河内ダム建設、宇宙ロケットの飛行など。
- * 5 水俣病を取り上げた石牟礼道子の作品など。
- * 6 海外の戦争を扱ったものとしては、ドーテ作「最後の授業」が普仏戦争の時代(1870～71年)を背景に取り上げられている。
- * 7 福田(2005)は、理由の一つとして教科書裁判における杉本判決の影響を挙げている。